



大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

大内輝弘

大内輝弘は、周防の戦国大名大内義興の異母兄弟に当たる高弘を父として、永正17(1520)年に生まれ、永禄12(69)年に没した武将です。

大内家の嫡男ではない父高弘は、出家して大護院尊光を名乗ります。ところが明応8(1499)年、重臣の杉武明がたくらんだ義興への謀反計画に加担したとして、尊光は周防を出て豊後の大友親治の下へ逃れます。

大内輝弘が上陸した秋穂の海岸(山口市)

亡命後、大友氏の客将となった尊光は還俗し、室町幕府第11代将軍足利義高(後の義澄)から偏諱を与えられて「高弘」と名乗りました。嫡男の輝弘は、豊後で生まれます。

この間に周防では、義興の跡を継いだ大内義隆が家臣の下克上で天文20(1551)年に没し、次に家督を継承した義長も隣国の毛利元就の軍勢によって弘治3(57)年に自刃に追い込まれ、西国の名門大内氏は断絶します。

豊後に生き残った輝弘は、大友氏の支援の下、質素な生活を

送っていたといわれます。しかしながら、やがて室町幕府第12代将軍足利義輝の時代になると、大友義興(宗麟)の援助と推挙により、将軍義輝から偏諱を賜って「輝弘」を名乗ることになります。

周防大内家再興の機会を狙う輝弘は、筑前の立花山城(福岡市東区、新宮町、久山町)で毛利軍と大友軍の抗争が続く中、永禄12(69)年10月、毛利方の背後を突く形で周防へ渡りました。

若林鎮興率いる大友水軍に護衛されて吉敷郡秋穂(山口市)の海岸に上陸した輝弘は、大内一族の復帰を願う旧臣らの呼応を受けて守護所山口へ進軍します。

一方、輝弘軍の攻撃を知った毛利元就は、北部九州の戦線に投入していた軍を撤退させ、息子の吉川元春と小早川隆景を周防に向かわせました。最終的に毛利軍は、輝弘を富海(防府市)

の茶臼山で自害に追い込みます。歴史上「大内輝弘の乱」と呼ばれるこの軍事騒動は、こうして大内氏を名実ともに滅亡へと導くことになりました。

乱後、大内氏の残党を掃討することに成功した毛利氏は、旧大内領の周防・長門両国の支配を確立します。一方で、この戦いのために主力軍を撤退させた豊前では拠点を失い、以後、毛利氏は九州進出から手を引くことになりました。

大友氏は、後方かく乱によって毛利軍を九州から撤退させることに成功し、この戦いで大きな利益を得ます。しかしながら、その安定的支配は長くは続かず、やがて今度は、九州内部での覇権を巡って薩摩の島津氏や肥前の龍造寺氏との対立を深めていくことになるのです。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

家再興を目指した武将